

「振り返り」

2026・5・13 重枝 一郎

私も、何らかの活動をした後は、必ず「振り返り」を行っていた。例えば、学年集会において、みんなの前に出て話した生徒たちに対して、集会後、集めて、小さな円になって「話してみてどうだった？」と必ず問う。そして、「次の機会では・・・」というマインドセットをしていた。また、聞いてくれたメンバーについての感謝も認識させていた。スピーチ力は、メンバーの聴き方で磨かれる。毎日の清掃後も同様に、掃除後に清掃区域のリーダーの周りにメンバーが集まり、プチ振り返りをし、「明日はここを重点的に・・・」とか、「こんな風にやってみよう」とか目標をつくっていた。

さて、毎日の授業ではどんな感じになるだろう。「振り返り」をする際、大切なのは、どのくらいメタ認知的知識が備わっているかということになる。メタ認知的知識が欠けている場合、生徒の振り返りのコメントは「がんばります」「次は気をつけます」といった情緒的な表現にとどまることも多い。反対に、メタ認知的知識が豊富な生徒は、自分の課題を適切に把握し、改善策を具体的に書くことができる。

つまり、「振り返り」を定着させるためには、振り返りが成立するための認知的基盤を育てなくてはならない。「振り返り」は学習の副産物ではなく、学習を生成し続けるための核になる営みになる。

例えば、数学の授業において「振り返り」が形式的で、家庭学習に結びついていないということがある。生徒の多くが、問題集を機械的に解き、間違いの原因を分析することなく、解き直すだけの学習をしている。同じ様な状況は他教科でもあると思う。そこで、「振り返りシート」の工夫が考えられる。このシートの目的は、まずは、自分のつまずきをはっきりさせることをさせなくてはならない。それは、どんなつまずきなのか明確化することである。それが、「振り返り」が、単なる感想から、課題把握とその改善を結びつける思考に徐々に変化させていく。

一方で、記述が浅くなる生徒や、課題設定が授業内容とずれるケースもある。単に「振り返り」を書く欄を設けただけでは「振り返り」がなかなか深まらないことも多い。そんな時は、具体的な観点を提示しておくことも段階的にはアリである。それは「つまずきの種類」と、それに伴う「課題解決の取組」をヒントとして提示しておくというものである（下表：数学例）。生徒は書くためのポイントを整理しやすくなることで、メタ認知的知識を増やしていく。その支援で、「振り返りシート」の中に、「つまずきの種類」の当てはまる番号を書いて、その横の欄につまずきを乗り越えるための取組の工夫を明記させる。

番号	つまずきの種類	課題解決の取組
(1)	新しい用語、定義などの意味する内容を、自分の言葉や具体例などで説明できない。	図、式、具体例、教科書に書かれていない言葉を用いて用語、定義の解説をまとめる。
(2)	定理、公式の証明を説明できない。	証明を書き、理解するために必要な言葉やイメージを補いまとめる。
(3)	例題の解法で「なぜそのようにするか」を説明できない部分がある。	例題を解き、補足説明を書いた吹き出しを書き加える。

(4)	例題の解法は理解できているが、確認問題を解く過程で間違える。	確認問題の数を増やし、間違えた場合はポイントを書き加える。
(5)	確認問題はできるが、人に説明できない。	解く過程を意識する。また、記述内容に気をつける。
(6)	確認問題は確実にできるが、発展・深化問題ができない。	応用問題のどこが変化しているのかを分析し、一般化を考察する。

私たちが授業で行う「小テスト」がある。これは「振り返り」の経験の絶好の機会になる。「小テスト」と「振り返り」のサイクルの取組は、「振り返り」の経験の蓄積とメタ認知の言語化を組み合わせることになる。この取組は、生徒の確かな学習の変容を見ることができ。

これをすれば成績が上がるという目標で考えると、そうは思わない教師もいると思う。時間のムダだと思う教師もいるだろう。ただ、生徒のメタ認知的知識が少ないと感じるなら、何らかの取組が必要になる。このメタ認知的知識の支援を要する生徒は、もしかしたらクラスの大半になるかもしれない。私が言っているのは、メタ認知的知識を増やすことで、テストのスコアを上げるのは第2義で、第1義は、将来の生きる力を育むことである。